

「君は海を見たか」

一郎の家

コヒ ~~がぐぐぐぐ~~煮えている。

弓子、アイロンをかけたつづつポツリと、

弓子「兄さん」

一郎「？」

弓子「新居の建築、中止になったの？」

一郎「立石たていしに聞いたのか？」

弓子「~~首を振る~~ 桂子けいこさん

十郎「――」

黙っている。

弓子「立石さん、桂子さんどこに相談に行ったらいいの」

十郎「――」

十郎、黙ってコヒ ~~を落として~~いる。

弓子「~~アイロン~~かけたつづつねえ」

短い間。

一郎「何？」

弓子「そういうのって――まずいんじゃないのかしら」

間。

一郎「何故？」

弓子「だって――正一しょういち、変だと思うでしょう？」

十郎「――」

弓子「正一だって家が建つこと、とっても楽しみにしていたん

だもん。ああやって設計図まで作ったりして」

一郎「――」

弓子「建築を中止にしたら何故だって思うよ」

一郎「しかし――」

間。

弓子「何？」

間。

一郎「事態がどうなるかわからないとしたら」

弓子「何？」

一郎「――」

弓子「事態が変わったら、何がどうなるの？」

一郎「つまり……、家そのものの設計だって」

弓子「~~鋭く、低く~~」どういう意味？——兄さん、それいったいどういう意味？」

一郎「——」

弓子「何カ月か先に正一がいないなら、子供部屋は最初から作らないって意味？」

一郎「——」

弓子「正一の部屋はいらなかったこと!？」

十郎、いきなり振り向きざま弓子の頬を張る。  
頬をそそねて蒼田の弓子。

蒼田の十郎。

一郎「……（かすれて声で）そんなことを、誰が……いつ、言った」

弓子「——」

一郎「俺はただ——先の事を想像しただけだ——家が建った日に——子供部屋があつて……もしもそこに正一がいないとしたら——」

弓子「——」

一郎「正一がいないのに子供部屋があつたら——どんな気持ちかと思つてみただけだ！」

弓子「——」

一郎「その部屋を見るたびに——俺はいつたい」

電話のベルが鳴る。

弓子、直ぐ取る。

弓子「増子ますこです。はい。あっ、はい！ ちよつとお待ち下さい  
(受話器を押さず) 木口先生」

一郎「~~サッと平気で代わる~~」増子です。いつもどうも……はあ……はあ……(ホソと緊張してカレンダーを見も)明日あすですか、はい。もちろん立ち合います——よろしく、どうぞ」

十郎、受話器に頭を下げ、電話を切る。

一郎「正一の手術が明日の一時に決まった」

弓子「——（コクンと頷く）」